

悲惨な光景、後遺症への不安、差別

被爆者の記憶 風化させぬ

「原爆の被害と心の傷は70年たっても消えない。悲劇を二度と起こしてはいけない」。4歳のときに広島で被爆した村上市の石山昭夫さん(74)は5日、広島市の平和記念公園で思いを語った。広島に原爆が投下され6日で70年。「被爆の記憶が風化しないよう伝えていく」。父と母の名も記された原爆死没者名簿が収められる慰霊碑に誓った。

きょう広島原爆70年

本県遺族代表石山さん(村上)

決意胸に平和式典へ



6日の平和記念式典に、本県の被爆者遺族代表として参列する。参列するのは4回目。戦後に77歳で亡くなった父・勇一郎さんと73

歳で亡くなった母・センさんの墓は本県にあるが、慰霊碑に手を合わせる時「両親はここにいるような気がする」と話す。70年前の午前8時15分、石山さんは母と2人で爆心地から約2・5キロ離れた自宅にいた。父は職場に向かう途中だった。まだ幼かったが、「家の中全体に光が入ってきた」ことを覚えていた。窓ガラスが割れ、間に破片が刺さった。母が布団とともに覆いかぶさってくれて、傷はそれだけで長く苦しんだ。

原爆死没者慰霊碑の前に立ち、「4歳だったけれども広島で見たものを語っていきたい」と話す石山昭夫さん＝5日、広島市中区の平和記念公園

石山さんは、被爆者の記憶の風化を懸念する。集団的自衛権行使を認める安全保障関連法案を巡る国会の動きも気になる。「このままではまた戦争が起こるかもしれない」

石山さんは原爆と戦争の現実を子どもたちに知ってもらおうと数年前から体験を語り始めた。しかし当時を思い出し、言葉が詰まってしまうことがあったこともある。本日は語りたくない。それでも「戦争は人間にとってプラスになることはない、伝えていかねばいけない」。70年となる広島で思いを強くした。

「家の中全体に光が入ってきた」ことを覚えていた。窓ガラスが割れ、間に破片が刺さった。母が布団とともに覆いかぶさってくれて、傷はそれだけで長く苦しんだ。

数日後、広島市中心部に行ったとき、焼けた路面電車の残骸が目の前に残っていた。「戦地のような光景。あちこちに遺体があり、嫌な臭いがした」。今も忘れることができない。親子3人とも九死に一生を得て、戦後は両親の故郷・関川村で暮らした。父は治療はしたが白血病を患った。母は腸の病気を患った。石山さんは「心の傷は健康手帳を申請しなかった。石山さんは「心の傷は、今でも残る」と顔をしかめ

石山さんも「いつか病気になるかもしれない」と悩みに続けただけでなく、地元の子どもに「ヒロシマ、ヒロシマ」とさげすまされた。「被爆者は伝染病患者のように扱われた」という時代で、家族の中でも原爆の話はしなかった。差別を恐れた父は、家族の被爆者健康手帳を申請しなかった。石山さんは「心の傷は、今でも残る」と顔をしかめ